私立全寮制御堂学園物語　巻2

□登場人物□

■神坂（かみさか）　純也（じゅんや）（〇年生）
学園の新入生。ごく普通の元気なサッカー少年。父親が『御堂』の社員であり、半ば強制的に学園に編入させられた。そこでの学校生活は入学前の不安をはるかに上回る想像を絶する世界となる。

■平田（ひらた）　裕（ゆたか）（〇年生）
純也と同じ小学校にいた友達。同じく父親が『御堂』の社員で、純也と同時に学園に編入させられる。まじめで勉強はよくできる。大人しい性格。

■岡本（おかもと）　将大（まさひろ）（〇年生）
純也と裕のクラスメイト。太って円満な外見通りおっとりのんびりしているように見えるが、実は頭の回転が速く、しっかりしてる面もある。

■清家（せいけ）　秀一（しゅういち）（高〇）
学園の理事の息子であり、学園生徒全体に闇の支配力を発揮。

■紅林（くればやし）　毅（たけし）（〇3）
秀一の配下№1。秀一の卒業後の跡を継ぐと目されている。体格がよく、大人並みの腕力が自慢である。柔道部。

■村原（むらはら）　秋信（あきのぶ）（高〇）
サッカー部。長身、短髪・長身で表面的には爽やかなスポーツ少年の顔を持つが、裏では清家の下で、歪んだ欲望を満たしている。

SAMPLE

■宮下　勝也（〇3）
清家の配下で紅林の同級生。色白で眼鏡をかけ、やや太めの大人しそうな外見を持つ。写真とパソコンが趣味で、典型的なオタク。

■涌坂　純一郎（34）
学園の理科教師。逞しい巨体の持ち主。裏で秀一とつながって自らの欲望を充足させている。

■猪瀬　幸仁（29）
いのせ　こうじん　美術教師で美術部顧問。飄々としているが、何かしら秘密を抱えていると思われる。

■清家　京輔（48）■
秀一の父で御堂学園理事。『総合商社　御堂』幹部役員の一人。

■岡本　泰山（51）■
「総合商社　御堂」の幹部の一人。将大の養父。社内では京輔と対立関係にあるといわれている。

■久保田　亮平（〇1）■
中学校からの編入組。柔道部で紅林に目をつけられている少年の一人。小柄で大人しい。理数系の能力は大学生レベルで天才的。

■河原林　修平（？）■
？

SAMPLE

第一章　幻影Ⅰ

僕は、うつむきがちな少年を脱衣場に押し込み、少年の前にしゃがむと、襟のくたびれたポロシャツの裾をすすけた半ズボンから引き出して、まくり上げる。わずかな膨らみ、絶妙な曲線、月光のように青白い肌。少年の呼吸に合わせて、その腹部の曲線が繰り返し上下する。

僕は手の震えを必死に抑制して、その腹部に手のひらをあて、軽く撫でる。びくりと、華奢な少年の体が震えた。

「先天的な知能に問題はないと思うのですが、ものも云えず、字も書けないのです」

施設の女性の、淡々とした言葉だった。

シャツを首から抜く。伸びすぎた髪が乱れてはらりと落ちる。うなじ、肩、二の腕、手首……。露出された体。この絶妙な曲線。僕の、僕だけの、宝物。

すすけた短いデニムの半ズボンを下ろし、洗い晒されゴムの傷んだブリーフに手をかけても、少年は人形のように動かない。怯えているのか、恥じらうことを、知らないままなのか……。

いきなり、性器を口に含んだ。小さな性器。でも青臭いあの臭いは口に広がる。少年は大きな声は、出さず、

「ア、ふ……」

と、意味不明の小さな高い声を出して、腰からその場に崩れ落ちた。

あっという間に、小さな性器は固くなって、口の中で、皮がめくれる。やっぱり、やっぱり十〇歳なんだ。こんなに小さいのに、今にも壊れそうなのに。かげろうのように、消えてしまいそ

SAMPLE

うだったのに。
隠花植物のように青白く不健康に思えた少年の肌が、鮮やかに赤みを帯びて、少年は僕の頭に両手を乗せ、荒い息を吐いていた。

「気持ちいいかい？」

（中略）

†

男達のどす黒い欲望の、白濁の体液に全身を穢され、犯された肛門は動く度に彼に鈍痛を与え、歩みを止めさせる。純也は、裕を気遣う余裕などなかった。それに……理不尽だ、と思った。裕を《守れる》なら、裕に笑顔を取り戻してやれるなら、殴られても、蹴られても、構わなかった。彼のために戦ってやりたかった。だが、彼を待っていたのは、想像を絶する情念と欲望の世界だった。

（狂ってるんだ……）

何が？　四人組か？　教師か？　この学園か？　ひょっとして裕も、なのか。

純也はどうしても振り向いて裕の顔を見ることができなかった。傷ついているであろう、助けを必要としているであろう、彼を、見ることができなかった。

ブースに戻った純也は、タオルをありったけ引っ張り出し、蛇口の並ぶ横長の流しで、濡らして絞った。納得のいくまでうがいしてから、五、六本の《おしぼり》を作った純也は、再びブースに戻り、服を全て脱ぎ捨て、体を拭いた。背中を強くこすると、傷にしみる。痛めつけられた内股は、赤く火傷の様相をあらわし、ひりひりと痛んだ。また乾いた血が流れてこびりついている。それは肛門から流れ出たものだ。純也はその血も拭き取りながら、思った。

（放っておいて治るんだろうか。あいつらが云ってたみたいに、クソも自分でできなくなるん

SAMPLE

じゃ……）

純也は頭を振って、余計なことを考えるのを途中でやめた。

（中略）

第四章　猪瀬の部屋

ギターを抱えた猪瀬について、二人は教職員寮棟に向かった。

猪瀬の部屋は、一般的なマンションのワンルームのように、ユニットバスや台所もついている。部屋にはグレードがあるらしく、給料からそれなりの金を払う気があれば、もっとよい部屋もあるらしい。

「僕の部屋は最低クラスだな。でも、設備が新しいから特に不満もない。風呂が狭いのは気に入らないが、ここには大浴場もあるからな」

裕と純也にいろいろと指示を出しながら、猪瀬は中華鍋を巧みに振るっている。濃厚な油の匂いが部屋に広がる。

「料理、得意なんですか？」

純也は後ろから猪瀬の手つきをのぞき込みながら話しかける。

「どうかな。それは味を確かめてから君たちが判断してくれたまえ。学生の頃中華料理屋で二年ほどバイトしてたんだよ。だからレパートリーは中華しかない。フランス料理がお好みなら、よそへ行ってくれ、と」

中華鍋の中を躍っていた中華あんと溶き卵が宙に浮かび、一回転してまた鍋に戻った。

「僕もけっこう料理好きなんです」

いつの間にか猪瀬を相手に多弁になっている純也。

「そいつは頼もしいな。今度は純也に何か作ってもらおうか。……と、ユウ。その皿にご飯盛

SAMPLE

ってくれる？　食べたいだけ」
裕はずっと一言も話さないし、返事もしないが、暗く沈んでいるわけではない。むしろ束の間の幸せを噛みしめているようでもある。エプロンをして猪瀬の指示に従う裕は、ちょっと女の子じみていて、猪瀬の奥さんみたいだ、と、そんな発想が頭をかすめた純也は、いつのまにかにやつきが表情に現れていた。
「ずいぶん上機嫌だな純也君」
重い鍋を持ってテーブル側を向いた猪瀬に言葉で虚を突かれ、純也は思ったままを口にしてしまった。
「いや、なんかゆう坊を見てたら猪瀬先生の奥さんみたいだなあ、と思って」
猪瀬は一瞬鍋を取り落としそうなった。
（純也君か。少年は鋭いな。痛い所を突いてくるぜ）
が、明るく大笑いして、
「そういや僕も三十路が近いな。ユウみたいなかわいい奥さんがいればいいんだが」
純也も大笑いした。
「やめてよ二人とも！」
裕は赤面してテーブルを叩いている。
「僕は男の子なんだからねっ！」
再び爆笑する二人。悪夢の夜がよみがえってきそうな会話の展開ではある。だが今は、二人ともそのことを完全に忘れることができていた。
ご飯の上に、様々な野菜を炒め合わせた溶き卵とあんかけ。変わり天津飯である。三人ともが急速に空腹感を覚えた。
「いただきます！」
三人の唱和。
食べたいだけ、と猪瀬が言ったとき、裕が自分の皿にどのくらいのご飯を盛るか、純也は少し心配していたが、裕は茶碗に二杯分くらいのご飯を何気なく盛っていた。食欲があるなら、まだ

SAMPLE

元気も残っている証拠だ。やせ細って壊れていく裕など、純也は見たくなかった。この先生のもたらす空気が、裕に元気を与えてくれるのかもしれなかった。学園の中に、彼の居場所があってよかった。純也は心からそう思った。自分は……。明日以降同じ顔で村原の顔は見られまい。でも、負けてたまるか、と思う。倒れるほど全力で体を動かせば、体からあらゆる《毒》は抜けていってくれるさ。

「黙り込んでるね、イマイチロに合わなかったか」

猪瀬の言葉に、純也は我に返る。

「い、いえ、おいしいです。お世辞じゃないですよ。な、ゆう坊？」

「うん！」

入学式の日、駆け寄ってきて見せてくれた裕の笑顔が、そこにあった。

「そいつはよかった。じゃ、今度は機会があれば、純也君の腕を見せてもらうことにしようか」

「はい！」

「それはあんまり期待しない方がいいかも……」

元気よく返事した純也への、思いがけない裕の悪態だった。こんなノリを見せる裕は、めったにない。

「何を～」

純也は立ち上がり、横に座る裕にヘッドロックをかけにいく。

「やだ、純ちゃん」

「こらこら、行儀悪いぞ」

猪瀬は目を細めながら、純也を止める。

（幸せな日々、か）

猪瀬の脳裏に、様々な想いが駆けめぐる。

（少年ばかりが集まる、僕たちのような人間にとっての楽園。時にはそこは、少年たちにとっての地獄でもある。僕は救い主にはなれず、ただ流されて快楽をむさぼるだけの、少年たちにと

SAMPLE

っての《奪う者》でしかあり得ないのか。僕はここにきた本当の目的を忘れようとし、むさぼる時を引き延ばしている。所詮、僕らのような人間は……。正しいのは、涌坂の方かもしれない。……いや、正解なんかないさ、たぶん）

幸福な時は足早に過ぎる。

「後かたづけは僕らでやります」

と言った純也と裕をほめて、皿洗いなどをする二人を見つめながら、猪瀬はギターを抱く。

（シュウ、涌坂先生よ。どこへ行くんだい？　お前たちに宿り木はあるかい？）

開いたドアの外に立ち、礼儀正しく頭を下げる二人に笑顔で手を振り、猪瀬はドアを閉めた。

（中略）

「酒とタバコの匂いは嫌いか？」

俺は荒い息の中、低い声でつぶやき、少年の半ズボンのベルトに手をかけた。

†

少年は抵抗している。必死に身を捩っている。口の中に、ウイスキーのアルコールとヤニの香りがする。

俺は、少年の両手を大の字に広げ、絨毯にめり込むほどに手首を俺自身の両手で押さえつけた。『ワルキューレの騎行』のサウンドがこの部屋を揺るがしている限り、少年が泣こうが叫ぼうが誰にも聞こえる気遣いはない。俺は少年の半ズボンから伸びた足も広げて俺自身の両膝で体重をかけて押さえ込んだ。

驚愕か、ショックのあまりか。少年は身を捩るが、咳き込みが治まるとわめくどころか声も出さなかった。いつか別の少年に、似たようなことをしたとき、「何をするの？」と恐怖に満ちた目

SAMPLE

で聞き返したような、そんなリアクションもなく、ただ俺を、潤んだ目で見つめている。……睨んでいる？

体格のわりには、力のない方でもなく、運動のセンスもある。それは、柔道部での彼を見てよく知っていた。だからと云って、六尺豊かな身長と九〇キロ近い体重の俺に、抗うすべなどない。もはや、少年は逃れることはできないのだ。運命をねじ曲げる俺の手から。それはもちろん、今日この今、終わるのではなく、始まるのだ。

少年の細い手首を束ねて、左手で押さえ、右手で紺のズボンのベルトに手をかけた。いきなり本丸を目指すわけだ。何が起ころうとしているのか、早くこの美しく、孤独で、高慢な少年に理解させたかった。

下履きは白いブリーフだった。俺はズボンと一緒にそれを一気に膝まで下ろした。

皮をかぶった性器は、着替えの時にちらちら見たことがある。歳の割には大きく、長い。煌々と灯った蛍光灯の下だからこそ見える、ごくわずかな陰毛。もちろん、入学したての頃はなかったはずだ。この時期からの一年間くらいが、一番好きだ。瞬く間に過ぎてゆく、うつろいの中の色香と美しさ。相手が彼だからこそそんな言葉も浮かぶが、要は、いかなる少年も《匂い》が変わる。確実に変わる。変わりゆく《匂い》。それが俺のセックスを刺激する。酒とタバコの匂いで、それを穢したくなる。

ペニスをおもむろに握ると、さすがに少年は声を漏らした。

「あ、ア……」

嫌だとも言わない。やめてとも叫ばない。ただ身を捩り、体を突き上げる感覚にあえぎを漏らすだけだ。

俺の脳裏に、濃緑の対地攻撃ヘリの行軍が、『ワルキューレの騎行』、そのサウンドとともに繰り広げられていた。

SAMPLE

（中略）

高等部の練習が終わった。威勢のいい挨拶のあと、紅林も、いったん将大を一人残して道場を出た。戻ってきた紅林の手には、剣道部の部室から持ってきた竹刀が握られていた。

「居眠りとはいい度胸だな」

紅林は、竹刀を将大の顎の下に差し入れ、軽く首に押しつけた。

「眠ってません。目をつぶっていただけですよ」

「うるせえ！　黙ってろ！」

紅林は、将大の裸の体の肩口あたりに竹刀を当て、強く押した。体勢を崩しかけて腰が浮くと、麻痺していた足の痺れが急に将大を襲い、さすがに唇を噛んで苦痛に耐える。

「正座だ正座！」

紅林は素足で将大のももの横を蹴った。

「なめたまねしやがって。何でわざと負けた？」

返事がない。

「てめえ……。何で返事しねえんだ！」

「黙ってろって云われましたから」

そう云って紅林の顔をきっと見返す将大の目には力があり、およそ腕力において負けるはずのない彼に対し、紅林は一瞬たじろいでしまう。そして、自分がそうなってしまったことが、より一層紅林の理不尽な怒りに火をつけた。

「クソガキ……」

紅林は将大の背後に回り、竹刀を振り上げて裸の背中に思い切り振り下ろした。乾いた音がし、将大は激しい痛みに「イッ……」と悲鳴を上げ、前の方につんのめった。背中には血が滲んでいる。昔の拷問具の割竹まではいかなくても、竹刀で素肌を殴れば、流血は避けられない。

うつ伏せに倒れて大きな尻を突き出した格好になった将大の尻と、肩口に、さらに一撃ずつ竹刀を振り下ろした。さすがに激しい痛みと足の痺れのために、うつ伏せに裸の体を投げ出したま

SAMPLE

まうめいて動けない将大を、紅林は肩で息をしながら見下ろした。竹刀を撃ち込んだ所が、自転車などで激しく転んですり剥いたようなかなりひどい傷になり、血が滲んでいるのを見て、「まずい……」という思いとともに興奮が冷めてきた。

性的いたずら、というより陵辱のレベルまでいけば、大概の少年は一般的な学校の条件下でも、めったに誰かに云えるものではない。しかし、怪我で病院に運ばれたら……？　ひどい傷を隠しきれず、誰かがそれを親なりに訴えて出たら……？　しかも、御堂では、将大の父親は清家の父親と並ぶほどの幹部の地位にあるのだ。秀一も自分をかばいきれないかもしれない。

しかし、紅林は怒りがおさまらなかった。

（あんな目で俺を見やがって。なめやがって……）

紅林は少し考えて、将大の柔道着を、うつぶせのまま呻っている将大の背中に掛けた。

そして、柔道着に覆われた肩口から尻まで、十数回にわたり、仮借無く打ち据えた。唇を噛む将大も、口から漏れる苦痛のうめきを、こらえることができなかった。特に、一度流血してしまった部分に、柔道着越しとはいえ、さらに竹刀が振り下ろされた時の苦痛は、筆舌に尽くしがたかった。

（中略）

「幸せな思い出もいつかは朽ち果てる。その鉄扉のように」

「かけがえのない命などどこにある？　死ねば朽ちていき踏みつけられ、穢される。その足元の亀のように」

本編をお楽しみに！

SAMPLE